

キャリア教育型インターンシップの好事例

——産学協議会での議論から

産学協議会では、Society 5.0が実現した2030年における採用・インターンシップの姿として、産学が共有した認識を示したうえで、そこに混乱なく移行していくために企業・大学・政府がとるべきアクションプランを提示した。

このなかで、インターンシップについては、2030年には、産学および社会のなかでその目的、意義や内容に関する新たな共通理解が生まれており、主として大学低学年（1、2年生）を対象としたキャリア教育としてのインターンシップと、大学高学年以降を対象に実際の職場での就業体験を通じて企業と学生の双方が就職におけるミスマッチを減らすためのインターンシップに大別されているという姿が示された。

産学協議会ではすでに、2019年4月に

公表した「中間とりまとめと共同提言」において、大学低学年向けのインターンシップは、企業で働くことや業界、職種を理解し、その後の大学における学修の動機付けとなる「キャリア教育」として位置付け、推進すべきと提案している。つまり学生は、低学年のうち、キャリア教育型インターンシップを通じて企業で働く際に必要となる能力や視座などを知り、そのうえで、自分が将来どのような職業に就き、どのような仕事をしたいか、そのために必要となる能力は何か、そうした能力を身に付けるために今後大学でどのような学修を積むべきか、を自覚する必要がある。産学協議会では、こうしたキャリア教育型インターンシップの好事例を収集したが、特徴として以下の点が挙げられる。

第1に、大学の正課として実施されている。

位置付けとしては、一般教養科目であったり、各学部・学科における専門科目、地域創生や地域人材育成課程の構成科目であったりともさまざまな。対象も低学年に限らず、学生は参加することにより単位を取得できる。

第2に、実際に企業等で職場体験を行う期間はさまざまだが、5〜10日間程度で、夏休み中に行うこととされているものが多い。また、職場体験だけで単位が取得できるものではなく、事前研修やオリエンテーション、職場体験期間中の報告、事後のレポート作成や発表会など、準備段階から事後の振り返り、今後の学びに向けた動機付けまでをトータルで学修したうえで単位が取得できることとなっている。加えて、職場体験期間中になんかの課題解決につながる提案を行うことが課されるものも多い。

第3に、学生が職場体験を行う企業等(以下、受け入れ先)を大学が手配することが多い。そのため大学が立地する地域の経済団体や企業、地方公共団体と大学が連携協定を結ぶなどして、実際には地域の経済団体や地方公共団体が受け入れ先をあっせん・手配して実施されているものもある。また、地域の大学や経済団体、地方公共団体がコンソーシアムを組織して、同コンソーシアムが受け入れ先の募集や依頼、インターンシップを行う学生の募集や受け入れ先とのマッチング等を行っているところもある。

第4に、受け入れ先となる企業は、CSR(企業の社会的責任)や社会貢献活動の一環として協力しているところもあるが、特に地方においては、自社を学生に認知してもらい、将来の就職先となることを期待しているところもある。

産学協議会では、産学が取り組むアクションプランのなかで、大学低学年を対象とする「キャリア教育としてのインターンシップ」を積極的に推進することとしている。そこで、以下に、産学協議会報告書に掲載されたキャリア教育型インターンシップの好事例をいくつか紹介する。

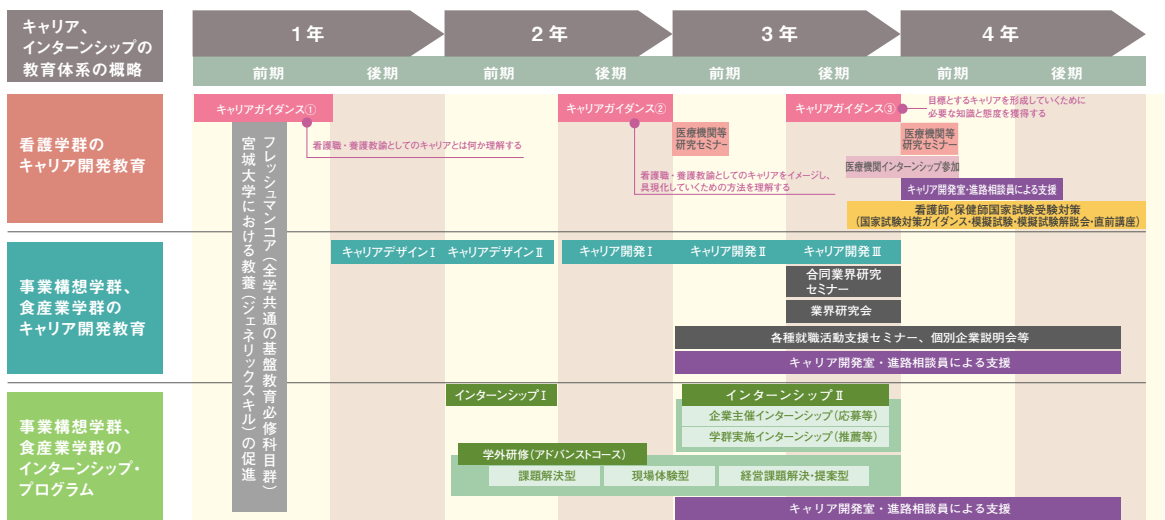
宮城大学におけるインターンシップ

大学での学びと現場の課題との関連を認識

することが重要との観点から、文系の事業構想学群および理系の食産業学群の学生は全員、2年前期に「インターンシップⅠ」への参加が必修とされている。ここでは、仕事に対する幅広い理解を深めるために企業人へのインタビューやプレゼンテーション等を行う。さらに、選択科目であるアドバンスドコースを履修する学生は、大学と提携した宮城県内の13社で5日間の就業体験に参加し、受け入れ企業が抱える事業上の課題の解決策の検討を主とする研修を行い、その成果を企業に提供する。これにより、総合的な人間力形成や職業観の養成、地域社会に対する理解促進といった教育的効果が図られている。

続く3年次に実施される「インターンシップⅡ」では、毎年100社程度の協力を得て、企業主催による公募型のインターンシップと大学・企業連携型のインターンシップの2種類を実施している。7〜10日間かけて現場業務や職務を広く経験し、社会人としての日常を学んだうえで学びや気付きをレポートにまとめさせている。

図表1 キャリア形成に向けた宮城大学の教育 4年間を通じたキャリア教育および就職支援



新潟大学における初年次転換教育 「フィールドスタディーズ」

文理の区分なく学生自らが到達目標を設定し専攻を定める学部である「創生学部」の1年生を対象に、学外で行う4週間程度のフィールドワークを必修科目(6単位)として開講。学生は、民間企業や自治体で現場の社員・職員をはじめ豊富な実務経験を有するさまざまな社会人との交流を通じた体験型学修を行い、最後に課題への取り組み成果に関しプレゼンテーションする。

体験型学修を通じて、学生は産業・地域での課題を理解し、「与えられる学修」から「主体的な学修」へと学びの意識転換が促される。また、その後を選択する専門領域への関心が明確化し、能力が伸長するといった教育的効果がある。

2019年度には、民間企業13社および2自治体と協働し、72名の学生が参加した。他大学や企業への一層の普及を目指すべきモデル・プログラムとしても評価されており、文部科学省の令和元年度「大学等におけるインターシップ表彰」において最優秀賞を受賞している。

※今年度はオンライン会議システム等を活用して実施。

(SDGs本部)

図表2 新潟大学「フィールドスタディーズ」授業の流れ(火・水・木曜日 9時~17時 全8週間)

